

平成28年3月30日

## 平成27年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）

### 被表彰都市の決定について

文化庁では、このたび、平成27年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）の被表彰都市を決定しましたので、お知らせします。

#### 1. 表彰の概要

文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域の特色を生かした文化芸術活動や社会課題の解決に、行政と住民との協働、行政と企業や大学との協力等により取り組み、特に顕著な成果をあげている市区町村に対し、文化庁長官が表彰する（平成19年度より実施）。

#### 2. 被表彰都市

・ 剣淵町（北海道） ・ 富良野市（北海道） ・ 豊中市（大阪府） ・ 竹田市（大分県）

#### 3. 表彰状授与日（未定）

4月以降、被表彰都市において、文化庁長官から各自治体の長に対し表彰状を授与します。

（担当）

文化庁長官官房政策課

課長 佐藤 安紀（内線2803）

課長補佐 所 昌弘（内線2804）

総務係長 尾曲 剛志（内線2806）

電話 03-5253-4111（代表）

# 剣淵町（北海道）

## 【自治体のあらまし】

剣淵町は、北海道の中央よりやや北に位置する純農村地帯である。明治30年天塩国（てしおのくに）上川郡に剣淵村・士別村・多寄（たよろ）村・上名寄（かみなよろ）村が設置されたのに始まり、大正4年4月に現在の和寒（わっさむ）町を、また、昭和2年10月に現在の士別市温根別（おんねべつ）町を分村し、昭和37年1月1日に町制を施行して現在に至る。

総面積の約半分を占める農耕地を基盤とする農業を基幹産業とし、総就業人口の約4割を農業就業人口が占める中、昭和63年以降、絵本をテーマにしたまちづくりに取り組む。「心の栄養は絵本で」「身体の栄養は無農薬野菜で」を合い言葉に農村の町が文化芸術の力によるまちづくりを実践している。

人口3,303人（平成28年3月1日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

昭和63年、当時児童図書編集長であった松居友氏を招き、「すばらしい絵本の世界とまちづくり」とテーマに講演会を行い、「剣淵の田園風景は、フランス、ドイツの田園風景にどこかにていて、絵本の持つ自然や生命を大切にする心を持った人たちが暮らすこの町に絵本の美術館ができたらどんなにすばらしいことか。」とのアドバイスを受けた。その言葉をきっかけに、以後、絵本をテーマにしたまちづくりに取り組む。昭和63年に設立された、商工会青年部、農業者、社会福祉施設職員、自治体職員、主婦などの有志からなる「けんぶち絵本の里を創ろう会」が「絵本の里づくり」の中心的な役割を担っている。

### ●絵本の里づくりと農業

平成2年、自然や人に優しい農業を実践し、安全な農産物を消費者に届けようと、まちの農業者が、無農薬・低農薬（有機栽培）の生産者団体である「剣淵・生命を育てる大地の会」を結成。絵本作家のデザインによるチラシなどを作成し、安心して真心を込めた、付加価値の高いじゃがいも、かぼちゃなどを全国各地に販路拡大し、販売を進めている。

また、近年には、剣淵町の若者農業従事者がユニーク



じゃがいも食べくらべセット

な販売手法で多品種少量生産の野菜を販売する「軽トラマルシェ」を考案し、新しいビジネスモデルを生み出している。



軽トラマルシェ 販売会

## ●絵本の館

平成3年8月に旧役場庁舎を改装し開館し、平成16年6月に現在の場所に新築移転した。一般書、児童書と絵本などを所蔵（計68,000冊余り）し、各学校への絵本の巡回文庫や、小学校での絵本の読み聞かせ、施設内での創作教室などを開き、「絵本の里づくり」の活動拠点として、重要な役割を果たしている。

また、館内の、「喫茶・らくがき」は、障害者の自立と社会参加の場として、社会福祉施設が運営を担っている。



絵本の館 外観

### ・平成26年度絵本の館施設利用状況

開館日数 318日

入館者数 大人22,155人 子供11,944人  
計34,099人



絵本の館 館内

## ●けんぶち絵本の里大賞

平成3年、絵本の館来館者から一番多く選ばれた絵本に贈られる賞として「けんぶち絵本の里大賞」が創設された。これまで25回の実績を積み、ここ数年は280~360点程度の応募があり、幅広く絵本作家や絵本出版社に知られている。大賞の副賞には剣淵町農産物が贈呈されるなど農業とのつながりも大きい。

### 平成27年度絵本の里大賞

応募総数357点 投票総数9,893票 授賞式来場者150人



絵本の里大賞 投票の様子



絵本の里大賞 授賞式

# 富良野市（北海道）

## 【自治体のあらまし】

富良野市は北海道の中央部に位置し、平成 28 年に市制施行 50 周年を迎える。西方に芦別岳，東方には十勝岳連峰がそびえ，市域の約 7 割が山林を占める自然環境にある。豊かな自然環境に恵まれた肥沃な大地では，多くの農産物が生産されており，ワインやチーズに代表される特産品が生み出されている。

また，過去 10 回 F I S ワールドカップスキー大会（アルペン競技）が開催された富良野スキー場，ラベンダーを始め四季折々を彩る自然景観，テレビドラマ「北の国から」のロケ地などにより全国に知名度が広がり，年間を通じて国内外から多くの観光客が訪れる観光地でもある。

人口 22,922 人（平成 28 年 3 月 1 日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

平成 12 年にオープンした富良野演劇工場は，運営を民間非営利法人（ふらの演劇工房）に託しており，ここを拠点に新たな演劇のソフトが生産されるとともに，様々な市民参加型のイベントが日常的に多彩に繰り広げられている。また，その企画・運営には，脚本家・倉本聰が主宰した私塾「富良野塾」のノウハウの蓄積が生かされており，地域全体で演劇によるまちづくりに取り組み，実績をあげている。

### ●富良野演劇工場

平成 12 年 10 月にオープンした，全国初の公設民営劇場。民間非営利法人「ふらの演劇工房」がボランティア組織で運営を受託管理し，創造的な運営を行っている。芝居づくりの拠点工場にしたいという思いが「演劇工場」の名称となった。富良野塾（現・富良野 GROUP）・富良野塾 OB などの地元劇団を支援するほか，市民や演劇人のための稽古場や発表の場の提供，演劇およびコンサートなどの鑑賞事業を実施している。



富良野演劇工場



舞台ホール



演劇工場でのロビーコンサート



## ●富良野塾 0B のコミュニケーション事業

俳優と脚本家の養成を目的として、脚本家・倉本聰が主宰した私塾「富良野塾」の卒塾生であり、富良野を拠点に活動する俳優やスタッフ達によって平成 21 年に演劇集団（富良野 GROUP）が結成される。ふらの演劇工房は、平成 22 年に大学の依頼でコミュニケーションワークショップを始めたのをきっかけに、富良野 GROUP などの俳優を講師役に、中高生や企業、町内会、ボランティア、富良野市内の高齢者が通う「ことぶき大学（高齢者大学）」などを対象に、毎年、コミュニケーションプログラムや表現プログラムによるワークショップを開催し、延べ 2,000 人以上の方が参加している。（平成 27 年度参加数 延べ 610 人）



コミュニケーションワークショップの様様

## ●ふらの演劇祭

平成 15 年に富良野市開庁 100 年記念演劇祭をきっかけに毎年開かれている演劇祭で、市民劇団のほか、希望する学校が「富良野 GROUP」の俳優による演技指導を受けて、富良野演劇工場で市民劇を含めた公演を 3 日間開催している。平成 24 年と平成 27 年には過去最多の 7 団体が参加した。

平成 27 年は、「ことぶき大学」の学生が「4 年間学習した成果を皆さんに見てほしい」と演劇祭に初参加。児童から高齢者までが参加することになり、会場を盛り上げている。

### 第 13 回を迎えた「ふらの演劇祭」



小学生の元気のある演技

中学生のチームワークの取れた演技

ことぶき大学（高齢者）の熟練した演技

# 豊中市（大阪府）

## 【自治体のあらまし】

豊中市は、大阪府の北部に位置する中核都市である。明治 22 年に豊島郡の 5 か村が合併し豊中村が置かれた際に、豊島郡の中央に当たることから、豊中の地名がつけられ、明治末から昭和初期に郊外住宅地として人気を博した。大阪市の北に隣接し、市内に大阪国際空港を擁することから、広域へのアクセスも良好である。そのため市北部に位置する千里ニュータウンなどをはじめとして、今もなお住宅都市として発展している。

高校サッカーや高校ラグビー発祥の地であり、大正 4 年に甲子園の前身となる全国中等学校優勝野球大会の第 1 回大会が開催されるなど、スポーツとの結びつきも深い。

平成 28 年 10 月には、市制施行 80 周年を迎える。

人口 402, 867 人（平成 28 年 3 月 1 日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

豊中市では、平成 18 年に文化芸術振興条例を制定し、その後、文化芸術振興基本方針（平成 20 年）、同推進プラン（平成 24 年）を策定し、「音楽あふれるまち とよなか」に取り組んできた。とりわけ、毎年秋に開催している「とよなか音楽月間」では、「豊中こども音楽フェスティバル」や「豊中まちなかクラシック」など市内各所で上演されるイベントで賑わい、多くの来場者が市内外から集う。

このような公演をはじめとする多岐にわたる音楽催事は、市内に立地する大阪大学、大阪音楽大学・同短期大学部や、日本センチュリー交響楽団との協定に基づく連携協力の効果を物語るものであり、これら 3 者と豊中市による官民連携事業だけでも年間 22 件にのぼる（平成 26 年度）。

また、市民活動団体と多様な主体で構成される「しょうない R E K（レック）」との協働で開催するワークショップや音楽祭は、市民の主体的な音楽創造の場となっている。

上記のような事業を展開する中、平成 28 年 10 月には豊中市立文化芸術センターのプレオープンが予定されており、その指定管理者は日本センチュリー交響楽団を含む共同事業体である。オーケストラが大型公立文化施設の指定管理者として携わる事例は国内では稀であり、注目を集めている。

## ●日本センチュリー交響楽団の活動

平成元年に活動を開始した日本センチュリー交響楽団は、平成 23 年度から公益財団法人として新たなスタートを切った。平成 24 年度には豊中市と「音楽あふれるまちの推進に関する協定」を締結。「豊中まちなかクラシック」で歴史的建造物などに質の高い演奏の場を広げ、豊中市ほか地域コミュニティや大学との企画に音楽の創造性を存分に生かしている。平成 26 年の創立 25 周年を機に首席指揮者に就任した飯森範親氏とともに一層多彩な活動を展開し、他府県へのコンサートも多数。



日本センチュリー交響楽団 ©s.yamamoto

## ●しょうないREKとの協働

しょうない REK は、庄内図書館を事務局として、市民、NPO、市の関係機関・部局等で連携して事業を実施している。図書館のリサイクル本の販売収益を公益活動に還元。多文化共生を目指す事業など、幅広い企画力で市内・南部の庄内地域の活性化に貢献している。また、豊中市や、日本センチュリー交響楽団、大阪音楽大学などとともに、作曲家・野村誠氏を迎えて開催する「世界の庄内音楽ワークショップ」，「世界のしょうない音楽祭」での協働が特筆される。



世界のしょうない音楽祭

## ●豊中市立文化芸術センターの開設

市民とともに文化芸術を新たに創造・発信し、心豊かな生活や活力ある地域社会の実現に寄与することを目指す拠点施設。平成 28 年 10 月プレオープン予定。1,344 席と 202 席のホールのほか、展示室や会議室、練習室等を備える。指定管理者制度を採用し、日本センチュリー交響楽団等の民間事業者の特色や実績を生かした管理運営を行う。様々な舞台芸術の鑑賞事業や、イベントを企画・運営できる人材育成のための多様な講座、ワークショップの開催などが予定されている。



文化芸術センター大ホール（イメージ）



# 竹田市（大分県）

## 【自治体のあらまし】

竹田市は大分県の南西部に位置し、周辺を九重（くじゅう）連山，阿蘇外輪山，祖母傾（そぼかたむき）連山など九州を代表する山々に囲まれ，湧水群や高原をもつ自然豊かな地域である。

昭和 29 年，当時の竹田町，豊岡村，玉来（たまらい）町，松本村，入田（にゅうた）村，姫岳（うばたけ）村，宮砥（みやど）村，菅生（すごう）村，宮城村，城原（きばる）村の 10 カ町村の合併により市制が施行され，その後，昭和 30 年 7 月に大野郡緒方村から大字片ヶ瀬（かたがせ）が編入。平成 17 年 4 月 1 日には，荻町，久住町，直入（なおいり）町と合併して新しい竹田市が誕生した。

大自然を生かした農業が基幹産業である一方，豊かな歴史的遺産や芸術資源も多数有しており，歴史や文化にもふれ合える観光にも力を入れている。

人口 23, 186 人（平成 28 年 3 月 1 日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

竹田市はアーティスト・イン・レジデンスの先駆地であり，古くから現在に至るまで市民を中心に活動が続けられ，地域の芸術・文化活動や移住・交流促進にも大きく貢献している。こうした歴史的経緯や地域特性を背景に，市ではアーティスト・イン・レジデンスを主要政策として位置づけている。

また，市は全国に先駆けて 2009 年に「農村回帰宣言」を行い，移住・定住に対するきめ細やかな支援を行っている。これらの文化芸術活動や移住定住促進の拠点として竹田総合学院（T S G）を創設し，地域特性を生かした人材育成と，就労・起業支援，地域資源の発掘を行っている。

## ●農村回帰宣言と移住定住

少子・高齢化，過疎化の克服，コミュニティの再生につながる移住，定住の促進戦略として全国に先駆け，平成 21 年 6 月に農村回帰を宣言，同年 12 月には 100 万人のふるさと回帰を目指す認定 N P O 法人「ふるさと回帰支援センター」と相互協力協定を締結する。

加えて，平成 22 年 6 月に「内に豊かに外に名高く」をコンセプトに都市で生活している人々の農村回帰の受皿として「竹



城下町 竹田



田市農村回帰支援センター」を設立。移住定住希望者に対しサポート態勢や支援制度を提供するとともに、市独自の空き家・空き店舗を活用した積極的な誘致を展開している。現在、移住定住者は 200 名を超えている。

### ●竹田総合学院（ＴＳＧ）構想

農村歴史観光都市としての地域特性を生かした人材育成と就労・起業支援，地域資源の発掘・利用の研究を行うことを目的に，平成 26 年 4 月に開設。

廃校をリニューアルし，農村回帰支援事業により移住した工芸家や職人を迎え，インキュベーション型工房を運営する。国内外から優れた芸術家や工芸家などが滞在制作しているアート・レジデンスにも活用されている。



竹田総合学院（ＴＳＧ）多目的ホール

### ●竹田市アート・レジデンス・プロジェクト

平成 26 年 5 月に竹田市アート・レジデンス・プロジェクトが発足した。このプロジェクトは，竹田市の魅力を情報発信し，市民が作家の滞在施設を登録して創作活動を行い，そこに竹田市での創作活動を希望する作家が国内外から訪れ，一流の感性で捉えられた竹田の風土を，作品を通じて発信している。



第 1 号招聘作家

ナターリア・マクシーモヴァ画伯(ロシア)

平成 2 7 年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）選考委員名簿

【選考委員】

磯田 憲一	公益財団法人北海道文化財団理事長
志賀野 桂一	東北文化学園大学総合政策学部総合政策学科教授
野田 邦弘	鳥取大学地域学部地域文化学科教授
藤野 一夫	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
藤原 恵洋	九州大学大学院芸術工学研究院教授
松本 茂章	静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科教授
吉本 光宏	ニッセイ基礎研究所研究理事